



町の特産“城下かれい”を育む藻場の保全

日出地域活動組織

日出（ひじ）町について

日出町は、大分県の中北部に位置しており、国東半島の付け根にある。町内の北西部には鹿鳴越（かなごえ）山系が広がり、南東部には別府湾に接する美しい海岸線がつづく。また、湧水が豊富で、町内の上水道もほとんどが良質な地下水で賄われている。

町の歴史は古く、原始から人が住み始め、全国的に有名な早水台遺跡など旧石器・縄文時代の遺跡が数多く残っている。



アマモ場の維持・回復に向けて

日出町には、かつて安定的なアマモ場が1年を通して形成されていた。しかし、その分布や被度は、現在、夏から秋にかけて大きく減少するようになった。そこで、当組織では、アマモの移植や播種を行うことで、安定的な藻場の回復を図っている。

(1) アマモの移植

アマモの移植は、5～6月に実施。移植する株数は、毎年約6,000株。移植方法は、当初は全国的に広く知られる粘土法などを採用。しかし、移植した株の流失が多く課題となった。そこで、現在は、小さい麻袋に砂を詰め地下茎を固定し、麻ひもで流出しないように結びつけ投入する方法（下図参照）で実施し、一定の成果を得ている。



特産「城下かれい」と藻場

町には「城下かれい」と呼ばれる水産物の特産品がある。「城下かれい」は、日出城跡下の真水が湧き出す海底で育ったマコガレイの呼び名で、江戸時代には「王余魚（おうようぎょ；王が余すことなく召し上がる美味な魚）」として徳川家に献上されていた。

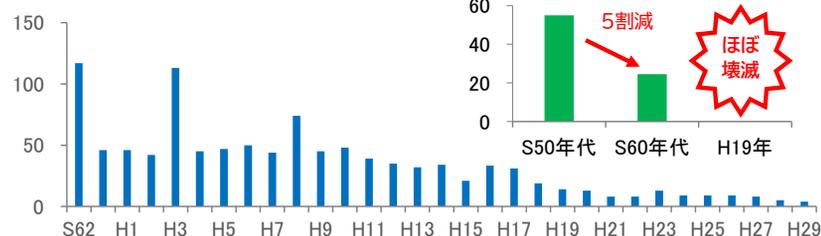
しかし、近年、江戸時代から親しまれてきた「城下かれい」の漁獲量が減少している。この減少の一因として、マコガレイの産卵場の減少が挙げられている。そこで、町では、平成12年から中間育成施設でマコガレイの稚魚を育て放流し続けている。また、これら稚魚が成長していく上で重要なアマモ場が、国道の整備等による埋め立てなどにより減少しており、その保全が求められている。

(2) アマモの播種

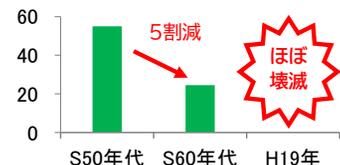
アマモの播種は、11～1月に実施。用いる種の数、毎年約5万粒。種は、①5～6月に天然藻場から花枝を採取し、町のマコガレイ中間育成施設の水槽に入れ熟成、②7月に水槽から種を選別し海水にいれ0℃で冷蔵保存。播種方法は、麻袋（米袋ぐらいの大きさ）に腐葉土と砂を1：4の割合で混ぜ、そこに一握りの種を均等にまき、袋を閉じ、1箇所10袋ぐらいを船上から沈める。



日出町のカレイ類漁獲量 (ト)



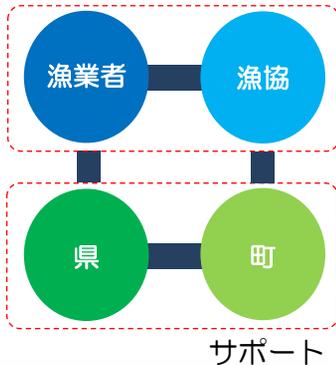
別府湾アマモ場面積 (ha)



組織の設立及び活動方針

上記課題の中、町の単独事業でマコガレイ等の稚魚育成場となるアマモ場の造成が平成23年度から進められ、その継続が求められた。そこで、平成28年度に漁業者を中心とした「日出地域活動組織」を設立し、アマモ場の維持・回復に向けた「活動方針」を組みを中・長期的に継続させる活動方針を定めた。

活動組織



●活動方針

目的	カレイ類等の稚魚の隠れ場・餌場となるアマモ場の再生
目標	アマモ被度の増大（前年度比5%以上の増加）
方法	不安定な状態にあるアマモ分布を移植・播種によって補い改善する

活動の効果と課題

活動エリアのアマモ平均被度は、年々漸増しており、令和元年度は55%で活動当初より被度が25%増加。また、大分県が調査した日出町のアマモ場面積についても、活動開始前の平成23年に比べて被度25%以上のアマモ場の面積が約3.3倍（5.0ha→16.5ha）に増加した。

加えて、当組織の取り組みが、広く一般に知れわたり、各種メディアに話題を提供したり、地域住民などの教育・学習の場になっている。

現在、アマモ場は徐々に再生している。しかし、最近の豪雨災害等で回復したアマモ群落が大きく減少する可能性がある。こうした災害は予測できないことから、今後も地道に活動を継続する必要がある。

アマモの平均被度 (%)

